

テーマ	体育授業を問い直す ～「そっとしておいて」の声に耳をかたむける～
発表者 (所属)	企画者：結城光紀（伊奈町立小室小学校） 司会者：石坂晋之介（上尾市立上平北小学校） 話題提供者：山下大晃（湯河原町立吉浜小学校） 北村尚人（小田原市立泉中学校） 指定討論者：杵渕利枝子（大学生） 後藤翼斗（宮城教育大学大学院 高度教職実践専攻） 関口実果（大学生）
【発表概要】 《企画趣旨》 <u>今までの体育授業は、本当に幸せだったのか？</u> 月刊誌「体育科教育」大修館書店 2019年3月号 巻頭エッセイ ヒヤダイン 「頼むからそっとしておいてください」（引用） <u>僕は体育の授業が大嫌いです。体育の教師も大嫌いです。</u> <u>「運動が苦手な子どもが輝く授業をつくろう」なんて</u> <u>～「運動が得意な子は輝いている」と思っていることですよ？</u> <u>上から目線の差別意識丸出しじゃないですか。</u> <u>したり顔での憐憫で恥をもうかかせないでほしい。</u> 私たち教師は、 「体育が楽しい！！」って思っているほしい。 「わかった！」「できた！」と喜んでほしい。 「友達とまたやりたい！」と、前向きな気持ちになってほしい。 そんな思いで、授業づくりを行なっている。 みんなが笑顔になるために、こんな方法がある！ 実践をまとめ、発信してきた。 しかし、本当に「全員笑顔」に向かっていたのだろうか？ 出会った子ども達は、本当に幸せだったのだろうか？ 体育授業の当たり前は、実は「チェンジ」が必要だったのではないのか？ 教師がつくる「授業のシステム」「ルール」の環境 教師が発する「子どもへの言葉」に隠れる教育観 教師が求める「授業のゴール」の方向性 今、立ち止まり、体育授業を問い直します。 <u>本シンポジウムでは、</u> <u>個人の運動経験のストーリーを手がかりに、</u> <u>体育授業環境や教師マインドのあり方を再考します。</u>	

《話題提供 1》

湯河原町立吉浜小学校 山下大晃

「運動ができなかった子供の頃。自身の経験からつくる体育授業」

「先生が来た時、1回だけやろう。」マットや跳び箱の授業は、いつも気配を消していた。自分のできる技を選んで挑戦する授業。友達が、どんどん次のステップに移って楽しそうにしている横で、自分はいつも一番はじめの技の場にいた。「どうやっても、次に進めない。」先生の口癖は「練習、頑張ろう!」。何回やってもできなかった。そのうち挑戦することがつらくなり、先生が来た時だけやることを身につけていた。

教師になり、自身の経験から、「本当にその授業は、子どもにつらい気持ちにさせてしまっていないか?」と考えながら授業づくりを行なってきた。自身の子供の頃の経験と、今、自分が行なっている器械運動の体育授業を紹介する。

《話題提供 2》

小田原市立泉中学校 北村尚人

「運動大好き少年。つまらなかった体育授業。」

私は運動が大好きでした。毎日サッカーに打ち込み、チームの中心で活躍するタイプの子供でした。体を動かすのが大好きなので、体育授業は好きでした。でも、体育授業がつまらないと感じることが多くありました。自分のできることを繰り返しやる器械運動、様々な制限があり自由にできないボールゲーム、先生の説明を聞いて話し合いが中心の時間。嫌いではないけれど、「もっとワクワクするものであってほしい。」と思っていました。

私自身教師になり、授業をつくる時は、運動に対して苦手な気持ちを抱いている子が「楽しい」と思えるように努力しています。あわせて、自身の経験から、運動が好きな子も「楽しい」と感じることでできる授業も目指しています。そんな私の経験と、日々行なっているボールゲームの授業を紹介します。

《指定討論者》

「体育授業」の記憶と共に、提案する体育授業のありかたについて意見を交流します。

杵渕利枝子（大学生）

後藤翼斗（宮城教育大学大学院 高度教職実践専攻）

関口実果（大学生）

《流れ》

- 1 自己紹介
- 2 基調提案「ヒヤダイン 巻頭エッセイ」（石坂）
- 3 討論1「体育授業の思い出は？」
話題提供者 山下・北村
指定討論者 杵渕・後藤・関口
- 4 討論2「どんな体育授業だったらよかった？」
話題提供者 山下・北村
- 5 まとめ